九月二十七日(水)

秋の夜と宇宙のつながるところにて土星の光輪を初めて見たり

塔短歌会の上杉憲一さんに、京都の花山(かざん)天文台に連れて行ってもらった。上杉さんは「星空案内人」の資格を持っている方である。よく晴れた夜で、望遠鏡をのぞくと、土星のリングが闇の中にくっきりと浮かび上がっていた。リングの厚さは十メートルから千メートルほどらしい。土星の直径が十二万キロなので、それと比べればずいぶん薄い。そんなぺらぺらなものが宇宙空間に広がっていて、今見ているのだと思うと、不思議な気分になる。

九月二十八日(木)

みずからの睫毛ちらつく闇のなか赤き縞もつ木星うかぶ

夜の八時ごろは低い位置に木星が光っていた。松の木の梢と同じくらいの高さだった。しかし、一時間くらいで、かなり高いところに昇っている。地平が近いと、大気の影響で像が揺らいでしまうらしいが、もういいでしょうと、望遠鏡が向けられた。あの小さい星の光が、拡大するとこんなマーブルの球体になるなんて、どこか信じられない思いが残る。